

演題番号：4

演題名：管内と畜場に搬入されたイノブタにおけるE型肝炎ウイルスの保有状況調査(第2報)

発表者名：○高橋まりこ<sup>1)</sup>、玉代勢旦子<sup>1)</sup>、今井隆之<sup>1)</sup>、工藤奈々<sup>1)</sup>、加藤峰史<sup>2)</sup>、新垣衛<sup>1)</sup>

発表者所属：1) 北部食肉衛生検査所、2) 衛生環境研究所

### 1. はじめに

E型肝炎は、E型肝炎ウイルスによって引き起こされる急性肝炎であり、感染症法で4類感染症に分類されている。HEVはブタ、イノシシなどの動物にも感染する人獣共通感染症であり、糞便や汚染水を介して経口感染する。ヒトでは感染動物の生食肉等を喫食することで感染することも明らかになってきた。前回(第1報)当所の今井らが平成28年7月から12月までのイノブタの大腸内容物98検体のHEV保有状況を調査した結果、同年6月の2検体が陽性であった。今回は、年間を通じたイノブタのHEV保有状況を調査し若干の知見を得たので報告する。

### 2. 材料および方法

材料は、平成29年1月から11月までに管内と畜場に搬入されたイノブタ192頭のうち、廃棄処分となった大腸143頭分の内容物とした。材料を約10%乳剤になるよう調整後、遠心分離し、その上清を検体とした。検体からウイルスRNAを抽出し、DNase処理およびcDNA作成後、nested PCRによりカプシド遺伝子検出(104bp~118bp)を実施し、HEV遺伝子の有無を判定した。また、肝臓の肉眼病変についても、検索した。

### 3. 結果

HEV陽性は、143検体中13検体(9.1%)であった。前回は98検体中2検体(2%)で、合計すると241検体中15検体(6.2%)が陽性であった。月別では8月が15検体中8検体(53.0%)で最も多く、次いで7月が8検体中3検体(38.0%)、6月と11月が各1検体であった。肝臓の肉眼病変は15検体中5検体で、肝包膜炎2検体、寄生虫性間質性肝炎1検体、その他間質性肝炎1検体、その他肝炎1検体であった。

### 4. 考察

今回の調査結果から、イノブタのHEV遺伝子保有率は、9.1%で、前回の2%から上昇しており、前年に比べて上昇傾向にあった。日本のブタのHEV遺伝子は2~3か月齢からの検出率が高く、6か月齢からはほとんど検出されず、HEV抗体保有率は月齢とともに上昇し、出荷豚は90%以上である。このことから、当該イノブタはブタとは異なり肥育後期にHEVに暴露された可能性も考えられる。また、陽性検体は6月~8月に多く検出されたことから、夏季の高温多湿による飼育環境の悪化が保有率上昇の一因ではないかと示唆された。今後、陽性検体については遺伝子型を検索し、その由来を確認するとともに、HEV抗体保有状況についても調査する必要がある。

HEVは、急性肝炎を引き起こすウイルスであるがイノブタにおいては肝臓病変に乏しいため、と畜検査での排除は困難である。今後も継続してと畜解体従事者への衛生指導や、肉・内臓の生食等の喫食に関する注意喚起の周知徹底に努めていきたい。